

1. 探し出せ！ 伝説の三大珍味

敦賀市立東浦小学校

6年 入野 はるな 辻 春奈 北川 まゆ

5年 大道 萌 随原 すずか

↓

各務原市立八木山小学校

6年 今西 七海 尾野 文美 服部 里帆

「わたたちのふるさと東浦には、伝説の三大珍味というのがあるのじゃ」

そう話し出したのは、東浦一番の長老、神殿のじっさまだった。

「えっ、その三大珍味っておいしいの」

と、すぐに反応したのは、東浦一元気で冒険好きの仲良し五人組。

しっかり者だけれど、あまいものには目がない「博士」こと若山純。見た目はでっかくてちょっと怖いけれど、実は友達思いの「魔王」こと南川直太郎。おっちょこちょいだけれど、アイデア抜群の「モンキー」こと小畠俊貴。恐がりて泣き虫だけれど、よく気がつく「エンジェル」こと入野秋奈。運動神経抜群だけれど、勉強はちょっと苦手な「もっこ」こと中道萌。この五人は、保育園の時からいつも一緒。三歳の時からつきあいになるので、あしかけ九年目。けんかもするけれど、すぐに仲直りしてしまうとても気の合う五人組なのだ。

「三大って言うぐらいだもん、すごく大きいんだろうなあ」

と、モンキー。

「いやいや。三大っていうのは、ベストスリーという意味だよ。だから大きさはわからないよ」

と、博士。

「でも珍味っておいしいんでしょ」

と、エンジェルが言うと、

「わたしは、キャビアやフォアグラは苦手だわ」

と、もっこ。

「珍味って珍しい味という意味だから、おいしいとは限らないけれど…でも、食べてみたいよな」

と魔王が言うと、他の四人も大きくなずいた。博士が、

「よし、東浦三大珍味を探しに出発だ」

と声をかけると、みんな大喜び。さっそくその三大珍味を求めて、東浦探検が始まった。

『三大珍味のありかのキーワードは、山・海・川じゃ』

という神殿のじっさまの言葉をたよりに、まずは山へ出かけることになった。

歌を歌いながら勇んで出かけた五人組だったが、山の奥に進むにつれ、だんだん歌声が小さくなっていった。

「クマやイノシシが出てきそうなかんじだわあ。そういえば、この前、私の家のじゃがいもがイノシシに食い散らかされてたのよねえ」

と、もっこ。

「いやだあ。クマやイノシシにおそわれたら大変だわあ。……ねえ、帰ろうよ」

もうエンジェルは涙声。でも、他の三人は何も聞こえないかのようにどんどん進んでいくので、二人は仕方なくついていった。

しばらくいくと、大きなほら穴が目の前に現れた。モンキーが、

「おおっ、これはあやしい。きっとこの中に、三大珍味があるんだぜ」

と、得意気に言うと、

「たしかに、このほら穴にありそうだ」

と、博士も自信満々に答えた。しかし、その隣で女の子二人の不安はますます大きくなっていった。

「このほら穴の中には、クマやイノシシがいるかもしれないよ」

と、エンジェルが言うと、

「クマやイノシシよりもっと怖い物が住んでいるかも。……何だか気味が悪いわ」

と、もっこ。二人は重い足取りでブルブル震えながら、三人の後についていった。しばらく行くと、

「あれ、道が二つに分かれている」

と、モンキーが叫んだ。どちらにしようか迷ったが、とりあえず、右の道に進むことにした。しばらく進むと、また、道が二つに分かれていた。なんということだ。このほら穴の中は迷路になっていたのだ。

「よし、ここからは二手に分かれて進んでいこう。おれとモンキーは右の道に進んでいく。魔王ともっことエンジェルは左の道に進んでくれ」

と、博士が声をかけると、みんなは大きくなずいて出発した。もっことエンジェルはさっきまでの怖さも忘れて元気いっぱい走り出した。

「ねえ、この迷路を早く抜け出して、三大珍味を一番にゲットしようよ」

もっこが張り切って言うと、エンジェルも魔王もさらにスピードアップした。

十分も走っただろうか。突然眩しい光を浴びて、三人は立ち止まった。

「オオー、この光はいったい何なんだ」

そう言って、魔王がおそろおそろ近づくと、それは、黄金色に輝く丸い物体だった。エンジェルともっこもこわごわ近づいた。

「ウーン？ 何だか酸っぱい香り……。これはもしかするともしかして……」

と、エンジェルがつぶやいた時、魔王が叫んだ。

「みかんだよ、みかん。これが東浦に古くから伝わる伝説の黄金みかんだよ」

エンジェルともっこはびっくりして聞き返した。

「伝説の黄金みかん？」

魔王は興奮して話し始めた。

「そうだよ。これが東浦のまぼろしのみかんに違いないよ。おれのひいおじいちゃんから聞いたんだ。千年前、楊貴妃からこの東浦のお姫様に送られてきたと言われるみかんの話を」

すると、エンジェルも身を乗り出して話し出した。

「私も聞いたことあるわ。一粒食べれば一つしわが消え、二粒食べれば二つしわが消えるという美容効果抜群のみかんの話のことでしょ」

もっことも得意気に話し始めた。

「うんうん、私も知っているわ。そのみかんはふつうのみかんの百倍のビタミンCが入っていて、ふつうのみかんには入っていないコラーゲンがたっぷり含まれているらしいわ。さらに、このみかんはおいしさもふつうのみかんの百倍以上なんだって」

「じゃあ、このまぼろしのみかんは、ぜひ母さんに食べさせよう」

と、魔王。

「うんうん、これでお母さんの怒りじわも少しは減るよね」

三人は笑いながら、そのまぼろしの黄金みかんを五つだけ持ち帰ることにした。

三人は、食べたみかんの種から東浦のまぼろしのみかんを増やそうと、わくわくしながら五つの光り輝くみかんを大事に抱えて進んでいった。

出口で博士とモンキーに会った。博士とモンキーは出口まで何も見つからなかったらしい。

五人は、初めて手にした東浦三大珍味の一つに大喜びして、二つ目の海の珍味探しに出かけた。★

「海といえば、やっぱりお魚かな」

と、モンキー。

「でも、海は広いからなあ」

「どこで何を探せばいいんだろう」

博士ともっこが首をひねった。

二つ目の海の珍味を探しに出てはみたものの、まだ何の手がかりもつかめていないので、しかたなくいったん帰ることにした。

五人は、じっさまのいる神殿へ行ってみた。

「おお、よく来てくれた。どれ、三大珍味は見つかったかね？」

「一つは見つかったよ。でも、二つ目の手がかりがつかめないの」

エンジェルが言った。

「おお、そうじゃった。これを見てくれ、古くから伝わる巻物じゃ。ここに『二』と書いてあるじゃろ。これが、二つ目の三大珍味の手がかりなのじゃ。開いてみい」

「何かで見たことがあるような気がするんだけど……。一度、家に戻ろうよ」

と、博士が言った。

「そうだね。手がかりをありがとう」

五人は博士の家に帰り、再び巻物を見てみた。

『みふうねの そみこうゆれみる うくろいなみがい（海鳥）』

「これって……。ほら、この一番最後って『うみどり』じゃないの？」

と気づいたのは、魔王だった。

「うみどり？」

「うみどりって、かもめとか？」

「違うわ。これ、暗号でしょ？ だから、巻物の中の文字から『う』と『み』を取って読むってことじゃないかしら？」

エンジェルが言うと、モンキーが、

「そうか、『う』と『み』を取って、『ふねのそこ ゆれる くろい ながい』だね」

博士が思い出したように言った。

「あっ、おれ、『沈没船 美髪姫伝』っていう本を読んだことがある。昔この東浦にいたお姫様が、黄金みかんのお礼に『何か』を持っていく途中で、台風に襲われて船ごと沈んでしまった、って話。題のように、そのお姫様の髪はきれいだったらしい。だから、『船の底 揺れる 黒い 長い』って、そのことじゃないかな」

「さっすが博士、よく知ってるわね」

と、もっこが感心したように言った。

「それなら、海に沈んだ船の底にある、っていうこと？」

「でも、お姫様の黒髪って関係ないんじゃない？」

「とにかく行ってみよう」

五人は、海岸へ向かった。

「俺、前から気になってたんだけど、引き潮の時だけ岩みたいなごつごつしたのが現れるところがあるんだけど……」

と、魔王が言った。

「あっ、それ知ってる。岩みたいなのに、しっかり角ばっているし、変だよね。まるで……」

と、モンキーが言い終わらないうちに、博士が叫んだ。

「そうか、それだ！ それがお姫様の船だ！」

五人は、魔王の案内でその『岩』に向かった。

岩のすきまから中に入ると、そこにはぎらぎらと光るわかめが生えていた。

「これが、三大珍味の二つ目？」

モンキーが言うと、エンジェルが言った。

「そうよ、このわかめを食べると、きっと、髪の毛がきれいになるんだわ。さっそく、持って帰りましょうよ」

五人は、採れるだけのわかめを採り、最後の珍味を探しに川へ向かった。

「わあー、水がとてもきれい」

エンジェルが言うと、みんなは川に駆け寄った。

「せっかくだから中に入って遊ぼうよ」

五人は、歓声をあげて川の中に入っていった。

数分後、エンジェルがきゃーっと叫んで川から飛び出した。

「ど、どうしたの、急に」

「な、なにか、足にぬるぬるしたものが当たった！ すっごいスピードで、いっぱい！」

「それはきっと、魚だな」

博士が言うと、

「ありえないって。だってどこにも魚なんて見えないよ」

と、モンキーが反対した。

「もしかして、目に見えない魚が三つ目の珍味なんじゃない？ 私、捕ってくる！」

もっこがいきなり川に飛び込んだ。少しして、川から上がってきたもっこの手の中で水がはねている。

「どう？ すごいでしょ。これは、あゆだね」

よーく見ると、魚の目が見えた。モンキーが大喜びで言った。

「やった！ これがきっと三番目の珍味だよ！ さっそくじっさまのところに持って行って確かめよう」

五人は、急いでじっさまのいる神殿に向かった。

「じっさま、三大珍味の二つ目と三つ目を持ってきたよ！ 確認して！」

五人は大きな声で言った。

「そうか、では、明日までに確かめておくから、また明日おいで」

神殿のじっさまにそう言われた五人は、次の日、神殿を訪ねた。

じっさまを見たたん、

「ああ〜っ！」

じっさまの顔には一本のしわもなく、つやつやふさふさした髪の毛、曲がっていたはずの腰もぴんと伸びていた。

「じっさま、まさか、三大珍味、ぜ〜んぶ、食べたんじゃないよね」

魔王がこわい声で言った。

「げ、ばれたか！ ゴホン。だが、食べてみなければ、本当の珍味かわからぬであろう？」

「ずる—————い！」